

ポスドク報告書

苅田 裕也

2024年6月

ドイツの Max-Planck Institute for Evolutionary Biology にてポスドクをしています、2016年度奨学生の苅田裕也です。ポスドク報告書の第三回を提出いたします。

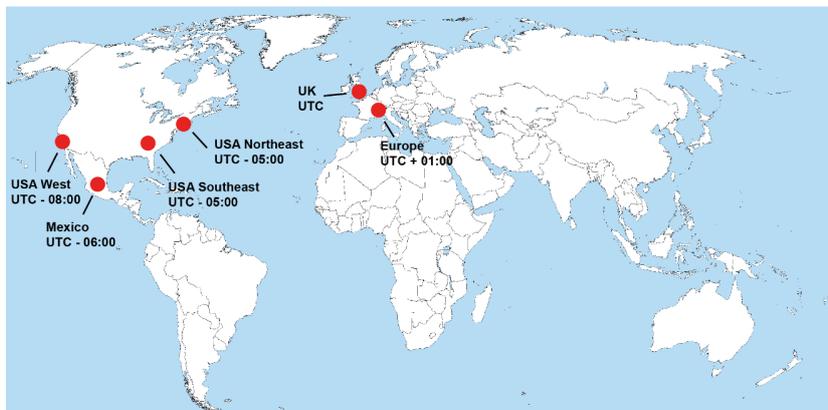
1 研究活動

ポスドク二年目に突入しました。気液界面でのバイオフィーム形成のダイナミクスを研究しています。短時間スケールでの物理的な集団現象と、長時間スケールでの進化的な挙動についてそれぞれ面白い結果が得られており、二つの論文として形にできるよう研究を進めています。現段階での研究成果について、1月と3月に国際会議で口頭発表しました。育児の関係でどちらも遠隔での参加となりましたが、パンデミック後のハイブリッド型会議に参加する良い経験になりました。

遠隔参加のオプションがあること自体は大変ありがたく、あらゆる国・ライフステージの研究者にインクルーシブな環境になっていると実感します。一方、体験の質としては対面参加に遠く及ばないと改めて感じました。ハイブリッド型会議の場合、現地参加者は現地での活動に集中しており、遠隔参加者はそもそも現地参加できない理由を抱えていて時間に制限があります。参加者とのコミュニケーションをとることが特に難しく、会議に参加する大きな理由のひとつが損なわれてしまいます。今回は対面参加の重要性を改めて実感する機会になりました。もちろん、ハイブリッド開催は継続すべきだと考えています。予算・ビザ・育児などの理由で対面参加が難しい研究者の助けとなるだけでなく、発表が電子化されるという副産物的な利点もあります。発表のレコーディングを後日見返すことやポスターに語句検索をかけることが可能となり、インプット面で便利です。

実は、私が一月に参加した Meehubs2024(Mee は Microbial Ecology and Evolution の略) はハイブリッド型の会議として非常に挑戦的でした。欧米では研究者の海外出張の多さが予算・環境負荷の面で問題視されており、sustainability を考慮した新しい形式が議論されています。Meehubs はハブ型の国際会議で、世界各地に対面参加のハブ会場が設置されています。各会場では対面の発表が行われ、違うハブ会場の発表はパブリックビューイングで生中継される形式です。対面での会話はローカルコミュニティに限定されてしまいますが、試みとして非常に面白いと感じました。今回は初開催なので、これから形式がブラッシュアップされていくと期待しています。現在の形式ではハブ間の時差の問題が非常に大きく、例えばヨーロッパからアメリカ西海岸の発表をライブ視聴することは時間带的に困難です。アジア地域ではこの問題はさらに大きく、今回の国際会議ではア

アジア圏にはひとつもハブが設置されませんでした。この現状には日本人として危機感を感じています。私は今回はリモート参加でしたが、次回以降はアジアハブの設置を目指したいです。



国際会議 Meehubs2024 のハブ設置都市。

2 生活

昨年末にドイツで第二子が誕生しました。第一子の面倒を見ながら海外で出産する不安は大きかったです(妻はさらに不安だったと思います)、息子がデイケアにいる時間帯に陣痛がはじまり、病院到着から1時間以内のスピード出産で無事に乗り切ることができました。実はその日は大雪のうえロードサービスのストライキで路面凍結がひどく、いろいろと苦労がありました。ここに書きにくいこともあるので、直接会う機会があれば聞いてください。書ける範囲の話だと、妻の病院食の質素さに驚きました。ドイツではカルテスエッセン(冷たい食事)という夕飯を火を使わない軽食で済ませる文化があります。夕食は冷えたパンふたつとチーズとハム一枚ずつで、夕食を重視する我々の感覚からするとかなり粗末です。事前に情報は知っていたので、陣痛がはじまってからおにぎりを握り、追加の食事を持参しました。



ドイツの入院食(夕食)。とても質素です。